
うみねこのなく頃に夢

美沢波江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うみねこのなく頃に夢

【Nコード】

N1746Q

【作者名】

美沢波江

【あらすじ】

主人公は縁寿の双子の弟

原作episode8までの知識あり

不定期更新

現在1985年編連載中です。駄文ですがよろしく願います。

episodio 神と俺（前書き）

駄文ですが、よろしくお願いします！

目が覚めて、いきなり飛び込んで来たのは、
見知らぬ女の顔だった…

「…目が覚めた？かなりぐちゃぐちゃになってたから、生き返らせるの大変だったのよ？」

ぐちゃぐちゃ？生き返らせる？

「…え…？…俺…死んだ…のか…？…？」

確か俺はさっきまでP Cの前に座ってて、ふと窓の外を見たらバスが突っ込んで来て…

「そうよう、ごめんなさいねえ私がミスしなければもっと長生きできたのに…」

「ミス…？って事はアンタのせいで俺は死んだのか！バスが家に突っ込んで来たのか！？」

「うふふ…そうよう、私のミスで君は死んだの、ごめんなさいね」

絶対この女悪いと思ってない

「ごめんなさいね　っじゃねえええええ！！どうしてくれんだよ！俺今から楽しみにしてたうみねこの翼やろうと思ってたのに！」

「そこで提案があるのよ、君を君が好きな世界へ転生させてあげるわ。」

「転生？そんなこと出来るのか！？」

「お安い御用、カップラーメンより簡単にできるわ。だって私は神なんだから」

「……神？アンタが？」

「その顔信じてない顔ね。まあいいわ。とにかく君の好きなマンガとかゲームとか教えてよ。なかったら勝手にドラ●もんの世界辺りにするわよ」

「えー、じゃあうみねこ世界がいい。設定とかそっちで決めていいよ。考えるの面倒だし」

「りょうかい じゃあいくわよ。」

そして女はパチンつと指を鳴らすと、俺の意識は闇に落ちた。

episode 1

転生したゾ（前書き）

今回は主人公の説明のような物なので
特に進展はないです…

俺はあのお陰で、うみねこのなく頃にの世界へ転生した。
転生したのは良いが、よりもよって何故…

何故…縁寿の双子の弟にしたし

この世界に生を受けてから3年。
やっと歩けるようになったり、言葉が話せる様になり、身体が自由
がきくようになってきた
それまでは、ハイハイだったりハイハイすら出来なかったり、かな
りきつかった
赤ん坊の身体だから仕方がないけど、喋れないので泣いて、ご飯の
催促をしたり、大人にあやされたりするのはものすごい屈辱的だっ
た。

「れおん！あそぼーあそぼー」

「うん、いいよ何して遊びたいの？縁寿」

れおんとは今の俺の名前。うしろみやれおん 右代宮礼御という。

…すげー名前だ。

理御と似たような名前なのはじいさんの気まぐれなんだろうか

そんなことは置いといて、さっき言った通り、うしろみやえんじえ 右代宮縁寿の双子の

弟であり、

るあゆむ 留弗夫ときりえ 霧江の次男である

はるひ 戦人は俺のにちゃんにあたる

「もぉー！れおんはわたしのことえんじえっていったらダメー！お
ねえちゃんっていいなさい！」

「わかったよ。ねえちゃん…これでいいか？」

そういうと、縁寿…いや、ねえちゃんは満足そうにニコニコ笑う
双子なのにねえちゃんとか呼ばなくてもいい気がするし、精神年齢
的にも3歳児にねえちゃんって呼ぶのも…

まあ、ヘソ曲げられちゃ困るから、仕方ない。ねえちゃんが満足す
るならそれでいいか。

うん、なんか慣れてきた…

さて「ねえちゃん何して遊びたいんだ？」

「うーんとねえ…あつ、おままごと！おままごとがいい」

”ま”が一つ多い…って3歳児だから仕方ないか。それにしてもお
ままごとか…

前世でやったのも幼稚園の時以来だな、そっぴや俺何故か馬の役ば
っかりやらされてたっけ

「れおんは、おとうさんでえー、わたしはおかあさんでえー…」

…久しぶりにやってみるか。

そうして俺は縁寿とおままごとを楽しむのであった

episode 2 1983年親族会議編1（前書き）

今回から1983年の親族会議編です。

今日は親族会議の日だ。そして原作のep7のクレルの話を信じるなら、ヤス…もとい紗音が、戦人に手紙を貰えなかった事に絶望しベアトに自分の恋心を受け渡す日でもある。

戦人には、あまり会わないからなあ、戦人が紗音の事をを想っているのか、そうでないのか、正直わからない。聞けばいいのだけの話なのだが、なかなかタイミングがないんだよな…。まあ別に1985年の親族会議までに戦人の気持ちを伝えてあげればいいやで、今俺は船に乗っているんだが…めちゃくちゃ速いし揺れる。これは戦人でなくとも、らめえ落ちるうつつて叫びたくなるわ。俺はやらないけど。うええ、気持ち悪い…

「大丈夫？ 船酔いしたのかな？」と譲治が俺を心配する。これで船酔いしない方がおかしいと思う

「大丈夫だ…問題ない…うぐ…」はやく着いてくれ

地獄(?)の船旅が終わり六軒島に着いた。

「六軒島へようこそ。長旅お疲れさまです。」と笑顔で出迎えたのは紗音。見た目は俺の知ってる原作のような姿じゃなく、どちらかといえば理御に近い姿である。この姿で妄想癖があるというのは、大変残念な美女だ。

「お屋敷に案内致します…。」どこか残念そうな声色でいう。やっぱり戦人が居ない事を残念がってるようだ。

そしてお屋敷にいく途中…案の定戦人の話に入り、霧江さんが戦人の手紙をみんなに渡す。譲治を通して。

そして、やはり紗音宛のはなかった。譲治にてめえ隠したろツ！って言うてみようかと思っただが、ここで俺が紗音の手紙隠したろなんて言ったら、いろいろ不自然だし、言わなかった。別に紗音の恋の

行方とか俺にはどうでもいいんだし。紗音は悲しそうな顔をしていた。

やっぱりなんか可哀想だから後でなんか励ましといてやろうかな。そして薔薇庭園が見えてくる。花とか全然興味ない俺でも素直に綺麗だと思えるくらい綺麗だった

「とつても綺麗だな、なあねちゃん…て、あれ？いない？」「そういやさつきから縁寿の声がまったくくしなれないと思ったら…」

留弗夫の肩でスヤスヤと眠っていた。今日は朝早かったからなあ眠くて当たり前か

みんなが十分、薔薇を堪能した所で、やっと屋敷に入る。今はゲストハウスがないため、みんな屋敷で泊まる。早くゲストハウス立たないかな。去年きた時も思ったけど、夜が結構寒い。そのせいで風邪まで引いた。

部屋に荷物を置き、屋敷を探検することにした。今までは、うまく歩いたり出来なかったから、ずっと霧江さんに手をひかれてたけど、今年は違うぜ。なんつったつてもうすっかり歩けるんだからなっ！身体が自由に動くつて素晴らしい！

「礼御、何処いくんだ？」朱志香が聞いてきたので「お屋敷探検。」と答えると何時の間にか起きている縁寿が「えーっ！わたしもいくっ！」と腕にしがみついてきた。

「えー、俺、一人で探検したいんだけど…」

「れおんひとりでいくとまいごになるかもしれないじゃん！」いくらでかい屋敷だからつてそれはないだろう。

「大丈夫だよ。迷子になっても使用人につつかまえて、みんなの所連れてつてもらっし。」

「むーっ」ほっぺを膨らませる縁寿。

「いいじゃねーかよ。一緒にいけば。一人より人数いた方が楽しいよ？」と朱志香が、いう

「そうだよっ、にんずういたほうがたのしいよっ」縁寿が若干涙目になりながら言う。寝起きだから余計感情が高ぶるんだろう

「……わかった。一緒に行こう。だから泣くな」と俺が言うと、
「うん！」と満面と笑顔になる。……嘔泣き？

子供の面倒は疲れる。本当に。こんなに疲れることを簡単に
やっつける譲治はすごいな

episode 2 1983年親族会議編1（後書き）

今回は縁寿と二人で屋敷探検です。

86年に惨劇起こして、ep4の未来編のような感じで真相に辿りつかせて終わらせるか、惨劇を未然に防いで終わらせるか、迷います…

御意見、御感想待ってます！

e p s o d e 3

1983年親族会議編2（前書き）

1983年ってひぐらしの年ですね。

さて、まずはベアトリーチエの肖像画が設置される予定の大広間にやってきた。

「ひろいねー。」

確かに広い。うちにすらこんな部屋はない。あっても使わないだろうが。

「でも、何もないな。ただ広いだけだな。」

なんか置けばいいのに、ピアノとか銅像とか壺とか。

ep8みたいにパーティでも開けば、飾り付けなどでとかで賑やかになるんだろうけど。

「ここつまんない。べつのところいこーよ。」

「だな。じゃあ、その扉入ってみよーぜ。」

入ってみるとそこは食堂だった。長いテーブルにはテーブルクロスが敷かれ、ナイフやフォークなどが規則正しく並んでいた。……

箸は……ないか。

「もうすぐごはんかな。わたし、おなかへった。」

「俺もー。そっぴや朝から何も食ってなかったからな。」

その時、ガチャリと後ろの扉があき、親族達がぞろぞろと入ってきた。

「何だ、ガキ共はもう来てたのか。そんなに腹が減ったのかあ？」

「うん！もうぺこぺこだよ！ねーっ！」

「うん。」

「そうか。だったらとっとと座れい。みんなが着席しねーと、始まらないぞ？」

「はい。」

俺と縁寿は向かい合わせに座る。ちなみに俺の左隣には夏妃さん。右隣には譲治が着席していた。

夏妃さんは、少し辛そうに頭を抱えていた。頭痛持ちって辛いんだ

ろうな。

そんな事を思っていると急に扉が乱暴に開かれる。談笑の声は途絶え、静寂がこの部屋を支配した。誰だと思い、扉の方に視線を向けると……

この右代宮家の当主でこの家一の変人で3年後に起きる事件のすべての元凶が……そこに居た。

「……………よく来たな。我が息子共よ。」

そう言々と金蔵は機嫌の悪そーにテーブルの上座につく。

……………なんか、さっきまでとは全然空気が違う。威圧感って言うかなんていうか……

いつも軽口ばっか叩いてる留弗夫ですら、口を閉ざす。向かいの席にいる、縁寿もこの空気を感じ取ったらしく、少し怯えていた

謎の威圧感を感じながらの食事を終えた俺は、気晴らしに薔薇庭園にでも行こうと思った。

縁寿も誘おうと思ったが、体調を崩してしまい、客室で寝てるらしい。さっきの食事の時の威圧感にやられたんだろう。しかたない、一人で行くか。

薔薇庭園を散歩していると、東屋を思い出した。彼処にでも座ってくつろぐか……

東屋に向かって歩いていると声が聞こえて来た

「……………てよ！」

あれ？誰かいるし。アレは……真里亞と紗音だ。

少し近づくと会話が聞こえて来た。

「妾はまだまだ希薄な存在……そなたや源次達以外とは会話すらできぬ。」

「もう少し反魔法の毒素が薄くなると、いいんだけどね。」

「…………ふっ。そうだな。だが、ニンゲンはみな生まれ持って毒素を

持っている悲しき生物だ。それはなかなか難しいことだ。」

「ワオ！どうやら、真里亞と紗音は魔女とその弟子ごっこをしているらしい。それにしてもこの紗音、ノリノリである。」

「真里亞ねえちゃん。紗音ねえちゃん。なあーにしてんのおー？」

あえて紗音と言ってみる。真里亞はどう答えるか。

「うー？違うよ。礼御。この人は紗音の姿をしてるけど、紗音じゃないよ。ベアトリーチェなんだよ！」

「ベアトリーチェえ？」

「そう！魔女のベアトリーチェ！」

紗音を見ると、頼むっ乗ってくれッとも言ってそんな顔をしている。んー。

「へえ！初めましてエー（棒）」

「うっ…うむっ！妾が森の魔女ベアトリーチェであるぞ！」

「フーン…じゃあさ、ベアトリーチェさん。俺に魔法見せてヨー。（棒）」

「よかるう。そこから小石を拾ってそれを妾に渡せ。」

ひょいと足元の小石を拾い。紗音に渡す。それを受け取ると紗音は、その小石を皿に乗せ、カップをかぶせた。それをテーブルにおいて、呪文を唱え始めた。

「小石よ小石。甘い甘いアメになれ。小石よ小石。甘い甘いアメになれ」

となえ終わったのか、紗音はカップに再び手を伸ばし、皿からどける。

するとそこには可愛らしくラッピングしてあるアメがあった。

目をつぶってる間に中身すりかえる子供騙しから随分進化したな。まあ、子供騙しから手品になったただけだけど

「おお、スゴイ。ベアトリーチェさんハー、ホンモノの魔女ナンデスネー（棒）」

「うーっ！礼御が信じた！これで仲間が増えたね！ベアト！」

こんなにワザとらしく棒読みしたのに信じたと思う真里亞は、もう純真無垢を通り越して馬鹿なんじゃないかと思った。

「……………お？ああ、そうだな真里亞。妾も嬉しいぞー。」

流石に紗音は真里亞ほど頭がお花畑ではないらしく、苦笑いを浮かべていた。

e p s o d e 3

1983年親族会議編2（後書き）

話がなかなかうまく進まない……＼（＾o＾）／
前回次はお屋敷探検編とか言いましたけど、結局全然探検してませ
んね…

e p s o d e 4

1983年親族会議3（前書き）

今回で1983年親族会議編はおしまいです。

[illegible]

食事は、さすが本家って感じなくらいは豪華だ。しかも、ウマイ。誰が作ってるんだろう。配膳する紗音に聞いてみた所、源次さんが作ってるらしい。執事としての仕事ぶりも完璧だし（ほどよくサボるが）、ナイフも投げられるし（？）、チェスも強いし、料理も出来るとか……完璧超人だな。そりゃあ、金蔵がいつも側に置いているわけだ。まあ、台湾にいた頃から仲が良かったのもあるだろうけど。

おいしい食事の後はダラダラとランプで遊んだり、テレビを見たり……縁寿と真里亞に混じって子供の遊びしたり……平和な時間を過ごした。……今年の親族会議は本当に平和だ。

そして、一晩明け親族達はそれぞれの家に帰っていった。

礼「アンタ、イベントがないからって適当に書いてないよな……？」
えっ！そんなことないですよ。

礼「復唱要求だ。筆者はこの話を適当に書いていない！」

拒否するっ！理由は筆者は魔女じゃないので、赤字じゃ答えられません！

礼「オイコラ、そんな理由で、逃げるなよ！」

さて、次回は戦人くんを登場させたいと思っております。

お楽しみにっ！！

礼「おーーい、こら無視するなーっ！！」

episodes

お留守番（前書き）

戦人くん登場

episodes お留守番

1983年 ? 11月

「ふんふんふーん」

縁寿が上機嫌に鼻歌を歌っている。えっ何故かって？今日は戦人が家に来るからだよ。

「……やけに上機嫌だな。そんなに、にいちやんが来るのは嬉しいか。」

「うん！うれしいよ！れおんはうれしくないの？」

「ん」嬉しいよ？戦人にいちやんいると、話弾むし。」

実際、家族の中で一番気軽に話せるのは戦人だったりする。留弗夫や霧江さんは、少し話しづらい。縁寿は…まだ見た目も中身も子供だし。

「おにいちやん。はやくおとうさんとかなおりすればいいのにな」

「そうだな。いつまでガキみたいに意地張り合ってたんだか。」

そんな話をしていると、玄関からインターホンの音が聞こえてきた。おっ、来たか？

「おーす。縁寿！礼御！」

「おにいちやん！久しぶり！」

縁寿が戦人に抱きつく、本当に戦人が好きだな…。この歳にして、既にブラコンの兆しが見え隠れしてるとは……。

「おう。縁寿！いきなり抱きついてどうしたんだ？そんなに俺に会いたかったのか？」

戦人も戦人で甘える縁寿に目尻を下げている。戦人って子供好きなんだな。

「にいちやん。今日はどうしたんだよ。珍しくウチに来るなんて。」

「霧江さんに頼まれたんだよ。今日はちょっと遠出して来るから、

二人の面倒頼むって。」

「ふーん。そういえば今日はかあさん朝早くからいないな。」

「そ。だから俺が世話焼きに来たんだ。… っても、縁寿はともかく礼御は面倒見なくても自分で何とかできそうだな。お前歳の割にかなりしつかりしてるし。時々俺より大人みたいだし。」

「そりゃそうだ。俺の中身は2●歳だからな。」

「そんなことない。大人ぶってるだけで、まだ子供。料理や洗濯なんて全く出来ないから。にいちちゃんが来てくれて心強い。頼りにしてるよ。」

「……？… おう！任せとけ！」

なんか不思議そうな顔をする戦人。ありや、なんか変なこと言っちゃった？

（戦人『子供って普通、自分で自分の事子供って言うか…？まあ、礼御はやけに大人っぽいし、言ってもおかしくない…か。』）

「にいちちゃん？どうしたんだよ？」

「あ… いや何でもねえよ。昼飯何にしようかなーなんて思ってたただけだよ。縁寿は何がいいか？」

「うーんと、えんじえはスパゲティがいい！ミートソースの！」

「ああ、じゃあ麺とソース買ってこねえとな。礼御もそれでいいか？」

「オッケー。ちょうど俺もそれ食べたいと思ってた。」

「さっすがふたごー。」

「うん。流石俺ら双子だね。」

やっぱり双子だと思回路が似るんだろうねと思うが、実際今までそんなにシンクロしたことないな…俺が前世の記憶なしの普通のニンゲンだったら、シンクロする事が多かったのかもしれない。

「おお、じゃあ、材料買いに買い物行くぞー。」

「わかったー。」

「了解。」

そして、俺らは仲良く買い物に行くのだった。

礼御「これって何話ぐらいで完結するんだ？」

作者「うーん、今ん所わからないね。まあ、事件の3年前から物語を初めてしまったからね。結構かかるかもしれない。」

礼御「ふーん。あと一話一話短すぎ。もう少し長く書いてもいいと思うが？」

作者「うーん。結構長く書いたつもりでも、実際読むと結構短いんだよね。で、しっかりしつとり、長めに書こうとすると、更新が不定期になっちゃうんだよね。どうしたものか…。」

礼御「お前の文才をもう少し高くすれば、毎週更新でも長く出来るんじゃないの？」

作者「無茶言うな！そう簡単に上手くなるわけないよ。」

礼御「……まあ、そうだけど。じゃあ、アンケート取るか？短くてもいいから毎週更新がいいか。不定期でもいいから、長めがいいか。」

作者「それいいね！……って訳でどちらがいいか、ご感想に書いていただけたら幸いです。取り合えず来週はいつもどおり更新予定です！お楽しみに！！」

episode 6 「……………」

「うまつ!？」

俺は今、口の中に放り込んだスパゲティの味に衝撃を受けている。戦人のお手製スパゲティ……美味しい……だと………？
しかも、かなり。

「てつきり、全く料理なんて出来ないかと思ってた。」

「いつひつひ…俺をみくびってもらっちゃ困るぜ。こう見えても、結構婆ちゃんに料理の仕方を叩き込まれてるからな!」

くそつ。無能のくせに…

「おいしー!」

縁寿が幸せそうにスパゲティを食べている。口の周りにソースが沢山付いてるぞ。

「あー。ねえちゃん。口の周りにソースが付いてる。ほら、拭いてあげるから、顔コッチ向けて。」

ゴシゴシと拭いてやる。うん、服は汚れてないみたいだ。よかった。ソースってなかなか落ちないし。

「うぐー。れおんはなんでじょうずにたべれるの?わたしもれおんのくちのまわりふいてあげたいーっ」

「俺はねえちゃんと違って大人だからね。そう簡単に口の周りは汚さないよ。」

「むうー。おなじとしなのに。なんで、れおんはわたしのこと、ごともあつかいするのー!？」

だって子供ですから。縁寿がこの歳にして18歳寿みたいだったら、こえーよ。コ○ンみたいに変な薬飲まされたりしたならまだしも…そんな薬、たぶんこの世界には存在しないだろう。

あー、でも俺みたいに転生して、縁寿になったとかなら、ありえるかも…。

「むししないですよ!もうしらない!」

おっと、縁寿は機嫌が悪くしたようだ。ほづを膨らませながら出て行ってしまった。ちよつと子供扱いした位であんなに怒る事ないだろう。

「あーあ、縁寿機嫌悪くしちゃったぞ。」

戦人が、困った顔で言う。

「大丈夫大丈夫！3時ぐらいになっておやつだよーって呼べばすぐ機嫌良くして戻ってくるよ。」

いつも機嫌が悪くなってもおやつになれば、ケロっとした顔で戻ってくる。まあ、子供ってそんなもんさ。

さて縁寿が向こうに行った事だし、戦人に紗音について聞いてみようかな。

「ねえ戦人にいちゃん。ちよつと聞きたいんだけどさ。」

「うん…？何だ？」

「紗音ねえちゃんって知ってる？」

「え…？シャノン…？ってあの若い使用人の子か？」

「うん。」

一応今は、覚えてるんだな。紗音の事は。まあ今からたった3年前だしな。

「あー。その子なら、知ってるぜ。と言うか、三年前まで、親族会議の度に、遊んでたぜ。紗音ちゃんがどうかしたのか？」

「いや、他の使用人と違って、にいちゃん達に歳が近いから、気になつてさ。にいちゃんが来てた頃も居たんだ。」

「そうだなー。紗音ちゃんは、確かに他の人と比べると、使用人としては若かったな。昔は、別になんとも思ってたけど、今から考えると、ちよつと変だな…。」

6歳当たりの時はともかく、12歳かそこらになつても不思議に思わなかったのか。

「にいちゃん。さつき遊んでたとか、言ってたけどどんな遊びした

んだ？」

ミステリー談義の話すか…？

「うーん。浜辺ではしゃいだり、話をしたりしてたな。あとかくれんぼとかしてたな。」

「へー。朱志香ねえちゃんに聞いたただけだよ。戦人にいちゃんと紗音ねえちゃんが2人で毎年コソコソと何かしてたって本当？」

もちろん、朱志香はそんなこと言っていない。

「え…！あれ、ばれてたのかよ…。」

「んー？あれって何の事ー？」

「いや、昔な、紗音ちゃんと2人で隠れてミステリーの事とか語り合ってたんだよ。」

おお、覚えてる！約束！約束の事は！？

「例えば、どんな話したんだ！？」

「えっ！どうしたんだよ。急に声張り上げ始めて…。」

「いいから教える！」

「わかった！わかったから！………とてもよく覚えてねえぞ？」

え…よく覚えてない………？

「うーんと確か。このトリックはノックス違反だとか。ハウダニツトだのフーダニツトだの…。」

当時小学生辺りのはずなんだが、そんなマニアックな話してたのか…。流石ミステリーマニア。ってそんなのじゃなくて…

「なんか約束みたいなしなかったか！？」

「え…？約束………？誰と…？」

「そんなの今紗音の話をしてたんだから、紗音とのに決まってるんだろっが！」

「うーん…？」

戦人は首を捻る。そして言った。

「？」

「紗音ちゃんと約束した覚えなんてねえぞ…」

epsoody

どう足掻いても…（前書き）

短め

「はあ……………」

「??…どうしたの？れおん。ためいきつくと、しあわせがにげると、おかあさんがいつてたよ？」

すっかり機嫌を直した縁寿がプリンを頬張りながら言った。

そりゃあ溜息着きたくもなりますよ。戦人は約束した事すら、覚えていなかった。つまり、戦人にとって、忘れてしまえる様な些細な冗談だったって事だ。……冗談は髪型だけにしてほしいもんだよ。

「惨劇防げるかな…………俺……………」

霧江さんが帰って来て、戦人が帰ってった後、自分の部屋で1人呟いた。

惨劇当日に犯人とつ捕まえるなんて俺には無理だ。なんせその時俺は”6歳”だ。6歳の子供は大人には勝てない。某マンガじゃ、博士が作ったメカを使って、犯人を撃退していたけど、生憎俺には、そんな博士の知り合いは居ないし、そんなメカ作れない。チート能力も何も持っていない。…………スタンガンでも買って改造しようかな。そしたら強力な武器になるな。……………よく考えたら、俺金持っていない…………おまけにこの姿じゃ、スタンガンなんて買えねえよ……………。

もう、どう足掻いても絶望じゃねーかよ…………orz

別に惨劇当日じゃなくても防げる可能性はあるけど、確信がない。あまり考えたくはないが、紗音が手紙を出さなくとも、ep7で語られた理御の世界の惨劇の様に黄金を巡って誰かが親組が殺し合いになる可能性だってある。親組が碑文を解かなくても、紗音が殺しにくる。まさに運命の袋小路って奴だ。

「ははっ……頭痛がすっ……」

episode 8 1984京都にて

1984年？？10月

今年も親族会議の季節がやって来た。今年からゲストハウスに泊まれるし郷田の料理も食べられるしwktk!!……とテンション上げてたら、風邪引いた。

「あー。この熱じゃ明日の親族会議は行けないわね。」

「えー」

「えーじゃないわよ。私達が親族会議に行ってる間しっかり寝てなきゃだめよ。」

霧江さんにより親族会議欠席が決定してしまった。

というわけで、俺は親族会議の日、京都のじいちゃんつまり須磨寺の家に預けられた。1日2日の親族会議なのにわざわざ京都まで預けにいかなくても……まあ、俺はまだ4歳だから、普通預けるか。ちなみに縁寿は親族会議に出席している。俺よりは遥かに軽いが少し風邪気味だったので向こうで熱が出ないか心配だ。

「ねーじいちゃん。」

「なんじゃ？」

「京都観光行きたい。」

「……病気を直してからじゃ。」

「ですよー。」

すぐそばで座って俺の様子をじいちゃんが見てるからおいそれと抜け出せない。どうしようか。

じいちゃんが座ったまま寝始めた。よし今なら抜け出せる!!

そう思った俺はなるべく物音を立てないように、パジャマから私服に着替え、京都の町に繰り出した。親族会議に出れない分楽しもう！

そこらをうるちよろしていると…

ゴッ…

「うわぁ！？」

誰かとぶつかって尻餅をつく。

「……………大丈夫ですか？」

高い綺麗な声が頭上に降ってきた。……………女か。

「イテテ……………うん大丈夫……………夫！？」

その女の顔を見て固まった。

「どうしたんですか。人の顔見て化け物でも見たような顔しないで下さい。」

いやいやいや、なんでお前がこんな所に……………

古戸アリカ！！

「あ、いや何でもないよ。ぶつかってごめん。」

「まあ、いいです。前を見てなかった私も悪いですし。」

言いながらアリカは辺りをキョロキョロ見回している。

「何か探し物？」

「え？ええまあ。そんなトコです。」

ははーん。親とハグれて迷子になったと見た。古戸アリカがこのような行動をとるだけで右代宮礼御はこの程度推理が可能です。如何でしょうか。皆様方！

「迷子？」

「ちっ違いますよ！親がどこかいつてしまったんです！」

「当たり前じゃん。一緒に探してあげよーか？おねえちゃん。」

「結構です。それに迷子なのは貴方の方では？ここら辺の子じやな

いですよね？」

「そうだよ。でも、迷子じゃないよ。じいちゃん家に遊びに来てるんだ。何で分かった？」

「…その喋り方です。ここら辺の人なら多少なりとも喋り方に訛りが入ってるものです。それが全くないので、そう思っただけです。」
「エリカは得意げに話す。これくらいは誰でも推理できるレベルなのに、そんな得意げに話されても…」

大阪弁はなかなか直らないらしいが、京都弁って数年別の所に住んでたら忘れてしまうような物が霧江さんは全然訛らない。…霞さんもそんな訛ってないな。二人が京都弁で話してるトコ聞いて見たいな。

「ねえねえ。ねえちゃん。俺と一緒に観光しない？」

「それナンパですか？もう少し貴方が大人だったら考えてあげたかもですね。」

中身はお前より年上だけど？…そんな事言えるわけない。

「ナンパな訳ないじゃん。ナンパならもっと可愛い子誘うし。一人で観光より二人で観光した方が楽しいからな、だから。ねえちゃんの両親を探すついでに。な！」

エリカは少し考えたが、その提案を受け入れた。

「まあ、そうですね。折角の京都旅行ですし。」

「じゃあ、レッツゴー！」

エリカは結構好きなキャラだったのでちよつとというかなんか会えて嬉しい。

「でも、いいんですか？私はともかく、貴方の家族が心配しませんか？」

「大丈夫大丈夫。今家にじいちゃんしかいないし、そのじいちゃんも寝てるから気づかない。」

「寝てるって…貴方まさか外出禁止とかなのになにに抜け出して来たんですか？」

「うん。熱があるから、まだ寝とけてるさいから。少し薬盛って……」

「……私に移さないで下さいね。」

俺が自分の祖父に薬盛った事には突っ込まないのか。スルーしてんのか嘘だと思ってるのか。

それから俺らは京都の観光地やらを回って行って気づけば夕方だった。……結構楽しかったな。

「あつ。お母さん。」

「エリカ！何処に行ったの？みんな心配してますよ。」

「すみません。」

どうやらエリカは家族と無事合流出たようだ。

「礼御さん。今日はありがとうございました。弟が出来たようで結構楽しかったですよ。」

「いやいやこちらこそ。付き合ってもらって悪かった」

今日のお礼を言い合い、別れた。

エリカには家の電話番号も教えてもらった。暇だったら電話をかけてだそうだ。勿論こちらの電話番号も教えた。今日一日で随分仲良くなったなあ……………。

家に帰ると目を三角形にした祖父がいたり、次の日高熱が出て目も当てられないような状態になったのは言うまでもない。

episode 1984 京都にて（後書き）

作者がエリカを出したかっただけの話。
礼御「おい」

来週は作者の都合により更新をおやすみします。楽しみにしてる方には申し訳ないです…。

episode

たまには子供の遊びもいいよね！（前書き）

久しぶりの更新です！

episode 9

たまには子供の遊びもいいよね！

1984年 ？12月

俺らの次男一家は用事のため、右代宮本家を訪れた。

「いつつも親族会議以外はめんどくせーからついてこない癖に今回はどうしたんだ？」

「何だよ。クソオヤジ。俺について来て欲しくなかったのかよ？毎回ついて来てほしそうな気持ち悪い顔してたクセに。」

「気持ち悪いとは何だ気持ち悪いとは。あと、戦人みたいにクソ親父って言っちゃダメだ。ったく似なくてもいい所まであいつに似やがって…」

あいつって戦人の事か？べつに戦人に似てるつもりはないけどな。確かに髪は赤いが。

「縁寿は礼御みたいに悪い兄に影響されてないよな」

留弗夫が縁寿に聞くと縁寿は

「…………クソ親父」

と、笑顔で言った。

霧江さんが甲板へ出てきた。

「…………留弗夫さんどうしたの？随分落ち込んでるようだけど…………」

「さあ？ねえちゃん知ってる？」

「うつん？どうしたんだらうね？」

数分後、六軒島に到着した。クネクネした道の階段を登り切ると、

広い薔薇庭園と建てられたばかりのゲストハウスがあった。

「おー。コレがゲストハウスか」。結構いい建物だな。綺麗だし。」
朱志香がこっちにも部屋持たいと言ったのも頷ける。

ドアの近くには渡来庵と書かれた看板が掛けられていた。洋風の建物なのになんで和風な名前なんだろう？ 渡来庵とゲストハウスだったら、断然ゲストハウスの方がしっくりくるだろう。

「礼御！礼御！今日、真里亚おねえちゃんたちがきてるんだって！あそびにいこう！」

「おわっ！」

もの凄い力で俺を引っ張って行く縁寿。結構力が強いぞこいつ。引っ張られて言った先は薔薇庭園から少し外れた所。そこに真里亚が座っていた。

「うー？縁寿！礼御！どうしたの？」

真里亚は分厚い本を読んでいた。その光景だけをみたら文学少女に見えるが、彼女が読んでいる本は聖書のようだ。日本で聖書読む小学2年生なんてそうそういないと思う。教会の子とかならまだしも。

「真里亚おねえちゃんがきてるってきいてきたの！おねえちゃんこの島にいるときいつもここにくるでしょ？」

「うー。そうだよー。何して遊ぶ？」

真里亚は聖書を手提げにいれ、立ち上がった。

「うーん……かくれんぼしようよ！いいよね礼御？」

「いいよ。」

「うー！じゃあジャンケンでオニ決めなくちゃね。」

「……じゃーんけーん……ポン……！」

えっと俺がグーで後の二人がパーで……俺がオニか。

「うー！じゃあ礼御がオニね！じゃあ百まで数えてね！それまでに隠れるから！」

「ちょっと待ってくれ。制限時間は？」

「うー……じゃあ今10：15分だから……11時まで」

「私時計もってないよ？」

「真里亞のもう一つ貸してあげるよ。礼御は？」

「自分のあるよ。」

真里亞は手提げをゴソゴソとあさり時計を取り出し、縁寿に渡した。

「うー！じゃあ！今から始めるよ？礼御は数えて始めて。」

「了解。行くぞ？123456……」

「早っ！？」

「うー！早く隠れよう！」

「99……100！」

やっと数え終った。よし探すぞって……この広い島の中を探すのか……？あー。だから11時までなのか……でもこりゃ探すの大変だろ……。

数分後、

薔薇庭園搜索中に右代宮真里亞を確保。

園芸倉庫の裏に居た。結構わかりやすい所にいたな。

「うー……。見つかった。」

少し残念そうだ。

「縁寿ねえちゃんの居場所知ってる？」

「うー。知ってても教えないよ。ズルだし。でも私も知らないから一緒に探そっか。」

「……そうだな。」

その後、薔薇庭園の中を探したが縁寿は発見出来ない。

「縁寿まさか屋内に居るのかな……？」

「どうだろ？取り敢えずまだ時間あるし、外探そうと思う。」

「うー。ちょっと寒くなつて来たから早く見つけたいね。」

「あ、俺のマフラー貸そうか？」

「いいよ。それじゃ礼御が寒いよ。それに私には少し短いよ。」

真里亞にとって俺の衣類が小さいとか3つも年下だから当たり前だが、なんか悔しいぞ。早く大きくなりたい。ちなみに真里亞との身長差は頭一つ分もある。

10:35分頃。礼拝堂前

「うー。礼御あと探してないのここら辺だけだよ。」

あたりを見回す。人気の全くない礼拝堂は少し不気味な雰囲気を出している。というか礼拝堂こんな奥の方にあつたのかよ。試しに礼拝堂のドアを開けてみようとして見る。ガチャと硬い施錠の手応えがある。

「この中にはいないみたいだ。鍵がかつてるし。」

「礼御。少し静かにして！何か聞こえるよ。」

「え？……ん？」

よく耳を澄ませると子供のすすり泣く声が聞こえる。

「怖っ！？ねえちゃんの声だつてわかつてても怖っ！？」

「うー。確かにこんな所に一人で居たときに、あの声が聞こえて来たら怖いね……。泣いてるみたいだし、早く迎えにいったあげよう？」「そうだな。」

声の聞こえる方向に歩いてくと、縁寿がいた。

「うつつ……礼御……ど、どうしてもっと早く……見つけてくれなかつたの……？」

「すまん、礼拝堂がこんなわかりづらい場所にあるとは知らなかつたんだよ。」

「むうー。」

「うー……縁寿機嫌直して。あつさつき熊沢さんからもらつたクッキー。一緒に食べよう！だから機嫌直して？」

真里亞はそういつて手提げから可愛いキャラクターが描かれたピクニック用のビニールシートとラップに包まれたクッキーを取り出した。……真里亞の手提げにはいろんな物が入ってたな。

「ゴハン前だからいいよ。昼ゴハン入らなくなるよ?」

「うー…。そうだね。真里亞も今食べたらきつとママに叱られるし……」

縁寿に拒否られ真里亞も拗ねるかと思ったが、どうやら大丈夫のようだ。

「あつ礼御はまだ見てないよね?ベアトリーチェの肖像画と碑文?」

「あー…うん。」

見たことないってつたら嘘になるが生では見たことないな。

「うーっ!じゃあ、今から見にいこうよ!」

「真里亞おねえちゃん……私はきぶんがわるいからゲストハウスにもどるね。」

「大丈夫か?さっきの遊びで体を冷やしたのかもな。」

「うー…じゃあ、真里亞と礼御だけで行くね?」

「うん。もしかしたらおひるゴハン食べられないかも……」

「うー。じゃあ、もし食べなくて、お腹空いたらこれ食べればいいよ!これなら少しづつ食べれるし。」

そういつて真里亞さっきのクッキーを差し出す。

「ありがと。」

縁寿はそう言つとゲストハウスへ向かつて歩いてつた。

「うーっ!じゃあ礼御行こう。」

「おう。」

そう言つて俺と真里亞は屋敷へ歩き出した。

episode 9

たまには子供の遊びもいいよね！（後書き）

久しぶりの更新なのに進展特になしという……orz

懐かしき、故郷を貫く鮎の川。

黄金郷を目指す者よ、これを下りて鍵を探せ。

川を下れば、やがて里あり。

その里にて二人が口にし岸を探れ。

そこに黄金郷への鍵が眠る。

鍵を手にしし者は、以下に従いて黄金郷へ旅立つべし。

第一の晩に、鍵の選びし六人を生贄に捧げよ。

第二の晩に、残されし者は寄り添う二人を引き裂け。

第三の晩に、残されし者は誉れ高き我が名を讃えよ。

第四の晩に、頭を抉りて殺せ。

第五の晩に、胸を抉りて殺せ。

第六の晩に、腹を抉りて殺せ。

第七の晩に、膝を抉りて殺せ。

第八の晩に、足を抉りて殺せ。

第九の晩に、魔女は蘇り、誰も生き残れはしない。

第十の晩に、旅は終わり、黄金の郷に至るだろう。

魔女は賢者を讃え、四つの宝を授けるだろう。

一つは、黄金郷の全ての黄金。

一つは、全ての死者の魂を蘇らせ。

一つは、失った愛すらも蘇らせる。

一つは、魔女を永遠に眠りにつかせよう。

安らかに眠れ、我が最愛の魔女ベアトリーチェ。

右代宮本家の碑文より

玄関ホールで、ソレは異様な存在感を放っていた。巨大なせいもあるだろうが、一番の要因はソレに描かれている女性だろう。なんせこの肖像画に描かれている彼女は、この屋敷に、居るハズのない人なのだから。

「おおお。これはなんとも、不気味な……」

「うー。ベアトリーチェに失礼だよ。」

「えー。少なくとも綺麗でもないし……不気味以外なんと表現すればいいんだよ。」

「うー……怪しい？」

それもベアトには失礼だろ

「怪しいといえば、この碑文……ねえちゃん答え解る？」

「うー？全然。譲治お兄ちゃん達とも考えたけど全然わかんなかった。」

「へー。」

多分譲治達の推理は金蔵の故郷は小田原という事が前提なのだろう。その前提が間違ってるんだから、そりゃ答えには辿り着けないよ。

「大人達は誰も解こうとしないの？」

「うー。誰も10tの黄金なんてないと思ってるみたい。」

まあ、現実味ないもんなあ。

本気で解こうと思えば、金蔵の故郷知ってればすぐ解けるのに……紗音に先に越される事もなかったらうな。

「みてみたいなー。黄金郷。」

「うー。真里亞もー。」

さっきのかくれんぼの時、礼拝堂でレリーフを見つけた、おそらくアレを弄れば黄金郷に辿り着くのだろうが……俺の身長では、割と高い位置にあるレリーフを触る事すら出来なかった。

もうちょっと俺の背が高かったなら……黄金郷行けたのに……。

時間ほとんど昼食の時間である。

「郷田さんの料理はとっても美味いんだぜ？楽しみにしとけよ！」
と大絶賛の朱志香の様子から期待出来そうだ。

食堂には、長男一家、次男一家、次女一家が集まっていた。……金蔵はいない。

「親父はどうしたんだ？機嫌悪いのか？」

「あ、ああ。こないだからろくに部屋の外にも出なくなってる…。
何、親父殿の奇行は今に始まった事じゃないだろう。気にせずに食事しよう。」

「そうね。もう十分待ったし、食事を始めましょう。真里亞達もお腹すかしている事だし。」

「わかりました。紗音。郷田に配膳を始める様にと伝えなさい。お義父様の書斎にも食事を運ばせるように」

「畏まりました。」

さらりと金蔵の死を隠す、長男一家＋使用人達。蔵曰はちよつと危なかったけど。

時間に厳格な金蔵が食事の時間に遅れてる事に親族達は若干の違和感を覚えたようだが、それも郷田の料理の旨さに消えて行った。

「美味しいなコレ！」

マジで美味しいよ。流石元プロ！確か…派閥争いだとか何かでやめさせられたんだっけ…こんな人やめさせるなんて勿体無い。そしてこの料理を食べられない縁寿が可哀想だ。

あれから縁寿はゲストハウスに言ったつきり屋敷にはこなかった。熱を出して吐いてしまったらしい、今は霧江さんに看病されてる。夏妃さんが気を利かせて、お粥を運ばせたらしいが、ちゃんと食べれてるのかな？心配だ。

「うー可哀想。こんなに美味しいご飯が食べられないなんて…」
「そうだな。元気になったらその分いっぱい遊んでやろうぜ。」

朱志香が笑顔でいう……が

「真里亞、できない。」

「おう……ってえ？」

「何でだよ？遊んでやったっていいじゃねーか。」

「うー。無理。真里亞、ベアトリーチェと遊ぶから、縁寿とは遊ばない。」

さらりと朱志香の問いかけに答える真里亞。ってか、この光景見覚えがあるような…

「ベアトリーチェと遊ぶって…あの気持ち悪い本を一人でよんでるだけじゃねーかよ…」

「うー！一人じゃないもん！ベアトリーチェと遊ぶのー！」

なんだか流れが悪くなってきた

「きひひひひ！！可哀想な朱志香！朱志香は才能が全然ないから、ベアトリーチェの姿が見えないんだ。きひひひひひひひ。」

いつもなら楼座さんの平手うちが飛んでくるが現在その楼座さんはお手洗いで退出中だ。そのためか切れた真里亞はますますエスカレートする。

「きっひひひひ。」

「きっ気持ち悪いんだよ！ベアトリーチェベアトリーチェって！！そんな奴！六軒島の何処にもいないのに！」

朱志香も言葉を返す。夏妃さんも止めようとするがその言葉は朱志香に届かない。

「きひひひひひ。」い”るよ？ベアトリーチェは…朱志香は愚か者だね。見えないからって”い”ないって言い張る。それは空気は見えないから存在しないっていう様なもんだよ？きっひひひひひひ！！「なっ……！！？」

このままほつといたら益々悪化しそうだ。

「二人共やめろ！飯がまずくなる。真里亞ねえちゃんも人の神経を逆撫でする様な真似やめて、朱志香ねえちゃんも落ち着いて！」

「…うー。」

「……わるい……」

流石に年下の俺に叱られるとはおもってなかった様だ。

「朱志香ねえちゃん。縁寿ねえちゃんの事は気にしないでいい。ねえちゃんには俺がいるし。ねえちゃんのために怒ってくれてサンキューな。」

朱志香の頭を撫でてやる。朱志香はまさか頭を撫でてられるとは思わなかったのか、赤面をしていた。

「ふっ。礼御君の方がよっぽど大人じゃないか。」

「本当ですね。朱志香がああの年頃の頃はもつと騒がしかったのに。」
そりゃあ中身はピー歳ですのですね。

その後、楼座さんが戻ってくるが、食堂の喧嘩でギクシャクした雰囲気は暫く拭えないでいた。

episode 10

魔女と真里亞と朱志香（後書き）

真里亞と朱志香って意外と原作でもあまり絡まないですね。同じ女の子同士もつと絡んでもいい気がする。

episode 1

黄金郷… かつこよく言えばエルドラド (前書き)

何処かしこも黄金黄金やつ ふうふう (ウサンノカオリ)

「紗音ねえーちゃーん。」

廊下を探索していると紗音に遭遇した。

「あら？どうなされましたか？礼御様？」

「……………」

何を話そう。思いつかん。あ、そうだ。

「黄金の隠し場所へ連れてってよ。場所知ってるよね？」

「え？何の事ですか？」

「とばけちゃってえー。当主様なら知ってるでしょ！俺じゃレリーフに手が届かなくて行けないんだよね。」

「……………」誰からその事を聞きましたか？」

誰からと聞かれてもな…………ゲームでやったとは言えないし…………

「……………俺実は…………超能力者なんだ。」

「はい？」

素っ頓狂な声を出す紗音。

「だから超能力なんだよ。俺。だから紗音ちゃんが碑文解いた事知ってたんだ。」

「……………そうなんですか。」

胡散臭そうに見てる紗音。

「理御？ベアトリーチエと金蔵の娘」

「っ！？そんな事まで知ってるんですか！？」

「ああ、知ってるさ。流石にパンツの色とかはわかんないけど。」

「それは知らなくて結構ですッ！！」

紗音は顔を真っ赤にして答える。

「……………本当に誰にも言っていないですよ？霧江様や留弗夫様がグルになつてませんよね？」

「言っていないよ。第一俺が言っただって信じないよ。」

周りをキョロキョロと紗音は見回すと、

「わかりました。そこまで知ってらっしゃるなら、案内いたしましょう。黄金郷へ！」

「礼御様は碑文の解き方もう知っているんですか？」

「もちろん！台湾の路線の駅名（qilian）を1000兆（Quadrillion）から引いて…（長いので省略）…ね？あつてるでしょ？」

「……………すごい。あつてます。」

紗音は礼拝堂でレリーフを慣れた手付きで弄る。するとライオンの像が動いた。

そのライオンが向いた方向へ歩いて行くと、地面にぽっかりと黒い穴が空いていた。

紗音が先に入り明かりをつける。

「気をつけてください。少し滑りますので。」

「はい。」

階段を降りてくと扉があつた。

「……………あれ？」

この扉には何も書かれて居ない。てつきり第十の晩に黄金の郷へ至るだろうつて書いてあるのかと思つたが……………まあ、いいや。

扉を開け、部屋に入る。その部屋は女の子が喜びそうな天井付きベッドやタンスなどの家具が置いてあつた。それらもかなり目を引く物だったが、それら以上に目を引くのは奥にさらりと置かれている黄金の山。決して中身がチョコレートだったりはない。本物の金。純金がそこに大量に置かれていた。頭の中でウサンノカオリが自動再生される。

「……………うっはあ。こりや凄い。」
こりや大人達が骨肉の争いを繰り広げるのも無理もないな。これだけのお金があれば賭博など馬鹿なお金の使い方をしなければ、当分は働かずとも何不自由なく暮らせるだろうし。ただ一番換金がたいへんそうだな。こんだけの量一気に換金なんて出来ないし。必ず出処は何処かと怪しまれるだろうし。

ふと碑文の最後の辺りを思い出した。

魔女は賢者を讃え、四つの宝を授けるだろう。

一つは、黄金郷の全ての黄金。

一つは、全ての死者の魂を蘇らせ。

一つは、失った愛すらも蘇らせる。

一つは、魔女を永遠に眠りにつかせよう。

安らかに眠れ、我が最愛の魔女ベアトリーチエ。

……………だったっけ。

「紗音ねえちゃんさ…魔女から4つの宝は授かった？」

「……………いいえ。黄金郷の全ての黄金は手に入りましたけど…あの三つは駄目でした。愛も…死んだ人も蘇りませんでしたよ。魔女は何の事だがさっぱりです。」

紗音は少し淋しそうな顔をしていた。

「魔女って多分。そこにある爆弾の事だと思うよ。」

「！？……………どうしてそう思ったんですか？」

「どうしてって言われても…。もう金蔵がコレを弄る事はないって事の比喻だと思うんだけど。つまりもう作動させないって事。」

「なるほど。……………爆弾の事まで知ってるなんて……………まさか、お館様の事ももう？」

「知ってる。死んでんでしょ？死体は何処隠してるが知らないけど。」

「……………。どうやってその事を知ったか知りませんが、言わないでくださいね。皆さんに。」

「言わないよ。それに俺は超能力なんだよだつつたじゃん。」

「嘘。貴方はもっと別の方法でこの情報を手に入れたんじゃないですか？」

「ほう……何故そう思う？紗音？」

「……女の感です。」

某サスペンスドラマの主婦かよ！！いや、アレは主婦の感か…あのドラマも面白いけど、同じ役者さんが主人公やってる法医学（ryも面白い

「女の感って本当鋭いね。」

「当たってるんですか？」

「……」

「答えてください。」

「まあ、いつか教える。俺がどうやってこの事を知ったかどうか。」

「本当ですか？」

「男に二言はない。」

「男性との約束は信用できません。とくに留弗夫様の血を引く貴方は。」

まあ、一回裏切られたしな。

「いやいや、俺は昔から約束は守る事に定評がありますよ？」

「そんな事聞いたことありません。」

「な、なんだってー！？」

「変な事やってないでとつと戻りましょう。そろそろ私の休憩時間も終わりますので。」

変な事っておい。？

「そつだな。そろそろとおさんの話し合いも終わるかもだし。」
少し名残惜しいが黄金郷を後にした。

episode 1

黄金郷……かつこよく言えばエルドラド（後書き）

地の文が少ない……だと！？

episode 12

船酔いと鳥肌とロリコン疑惑（前書き）

タイトルが前とかぶった感じに…

いきなりだが、今現在物凄いスピードで海の上を滑るように走っている川畑船長の船の上にいる。黄金郷にいつて帰ってきた後、縁寿の体調の事を考えて今日はもう引き上げようという事になったのだ。「病人が乗ってるってのに飛ばし過ぎだろ……うええ……」

余計気分悪くなるわ！

どうも俺は車に酔いやすいようですぐに気分が悪くなる。おかげで六軒島に来る道中はずっと気分が悪い。やばいマジで吐きそう……。

朝は割と平気だったんだけどなあ……。

「大丈夫か？」

気が付けば留弗夫がそばにいた。

「……大丈夫なわけない……。」

「酔い止め飲むか？」

「今更飲んだって遅いつての。」

どうやら留弗夫は素で心配してくれてるらしい。……てっきり朝の仕返しにでも来たのかと思った。いやでもそれはいくらなんでも大人気なさすぎるな。

「心配するなんて珍しい。今日の夜は嵐だなあ。」

「俺だつて自分の大事な大事な息子の心配くれえするさ。」

「気持ち悪っ！？」

厚着して温かい筈なのに全身に鳥肌が……

「失礼だな！心配して欲しくないのかお前は。」

「いや、心配されて嬉しいさ。でもとおさんにやられると……」

「俺の事を何だと思ってるんだ。お前は。」

昨日は夜に家に着いた。その頃には縁寿も俺もぐっすり眠ってい

たらしい。おかげで昨日の記憶が帰宅している途中から途切れている。

「グッモーニン。」

と言いながら、食堂に顔を出すと、霧江さんがキッチンにたっていて、縁寿はテーブルに座っていた。

「おはよう。礼御。」

「あつ、おはよう！礼御！げんきになったよ！」

「おお。長引かなくてよかったな！せつかくの冬休みが台無しになるもんな。」

「うん！」

とびつきの笑顔をみせる縁寿。うん。女の子は笑ってる顔が一番だと思う。つられて笑顔になる俺。あ、言っとくが、俺は決して口リコンじゃない。本当だって。ただ小さい子は可愛いなあと思ってるだけだ。

「え？ろりこんって何？」

はっ！？口に出してた！？

「りつリモコンって言ったんだよ。リモコンどこかなー？」

「えっ。でもまちがいなく”ろりこん”って言ったようない！」

「言っていない言っていない！」

全力で否定した。

1984年12月ももう特にイベントとかができそうにないので足早に終わらせようとしたら、こんな変な感じに……。本当すいません。文章力が欲しい。キュベえと契約してゲットしようか。それは置いといて、次から1985年編突入させます。さくたろうくん
でるよー。

1985年？

「……あー。くそ捕まったー！」

「お前下手くそだな」

ゲームセンターでパクマンに夢中になっている男二人。

「もう…お兄ちゃん達いつまでやってるの？私もう待ちつかれたよ」。

「お母さんも買い物行っちゃったし。」

飽きれる縁寿。それを無視して財布のがま口を100円を取り出す為に開けた。

「あつ！嘘だろ？いつのまにあと500円しかなくなっているんだ！？来る時は2000円はあったハズなのに！？誰が取ったんだ！」

「いや、お前が使ったんだろ。」

戦人が突っ込む。

「ええ！私まだガシャポン一回したただだよ？」

「うう…。ごめん。残りはねえちゃんが使っていていいよ。」

どうやらかなりの間俺はパクマンにのめり込んでいたようだ。姉弟で2000円を分けるように霧江さんに言われてたが、俺が半分以上使ってしまったようだ。

「もー。じゃあ残りはUFOキャッチャーでもしようかな。」

そっぴい縁寿は走ってUFOキャッチャーがおいてあるコーナーに行った。

「ふう…まさか礼御がここまでハマるとはな。今までやった事なかったのか？」

「ああ。初めてやった。」

まさかここまでハマるとは昔のアーケードゲームもなかなかだな

10分後

縁寿がとあるUFOキャッチャーの前でまだ動かずにいる。

「あれ。ねえちゃんさつきからずっとあのUFOキャッチャーの前にいるな。どうしたんだ？」

「本当だな。ちよつと見てくる。」

「あ、俺も行く。」

そういうと戦人と俺は今まで座っていたベンチを立ち上がり縁寿の方へ向かった。

縁寿がへばりついていた。UFOキャッチャーを見れば、アクセサリが入ったカプセルが山盛りにしてあった。

「あー。カプセルを取る奴か。ぬいぐるみとかだったら取れるんだけどなあ…。にいちちゃん取れる？」

「おお！まかしとけ。よく友達とゲーセンには来てるからな！」

「え！とつてくれるの？お兄ちゃん！」

「おうともさ！どれどれ…」

戦人は自信満々にそう言うのとレバーをスイスイと操作して中に入ったカプセルを一つ取って見せた。…うめえ。

「お兄ちゃんすごい！ありがとう！」

縁寿がものすごく嬉しそうに戦人に抱きつく。

「へへっ。これくらいお安い御用だぜ。」

戦人も喜ばれて満更でもない様子。

「中に何が入ってた？」

俺が聞くと縁寿は思い出したようにカプセルを取り出し開けた。

「…わあ。ヘアゴムだ。かわいい。」

中には、ピンクの玉が付いたヘアゴムが入っていた。18縁寿も大事にしていた品だ。こんな風に貰ったんだな。

「おお。良いもんゲットしたな。ちよつと貸してみ？」

戦人が縁寿からヘアゴムを受け取り縁寿の髪をそのゴムで結んだ。

縁寿が俺のよく知るツインテールの姿になる。

「…似合う？」

「かわいいよ。ねえちゃん。」

「うんうん。よく似合う！流石俺の妹だな！」

「えへへ。」

そこへ霧江さんが戻ってきた。

「あら？そのヘアゴムどうしたの？」

「えへへ。戦人お兄ちゃんが取ってくれたの！似合う？」

「ええ。とっても。かわいわ。」

その日の縁寿は終始笑顔だった。

episode 14

空港にて（前書き）

1985年親族会議編1

episode 14 空港にて

親族会議当日。

「どうどう？かわいい？」

気合いの入ったおめかしをした縁寿がこちらに問いかける。その頭にはこの間のヘアゴムが輝いていた。

「うん。よく似合ってるよ。」

褒めてやる。

最近オシャレに目覚めたのか。よく霧江さんの部屋に置いてあるファッション雑誌をとってきてはこれかわいいだの、かつこいいだの言っている。オシャレとかはさっぱりな俺には、そんな事してなにが楽しいのかよくわからん。

「もー。礼御も少しはオシャレに気を使えば？そしたら、戦人お兄ちゃんみたいにかっこよくなるよ！」

「遠慮しとくよ。俺センスないし。興味もない。」

「えー。絶対いいと思うけどなあ。」

新島に行く為の飛行機に乗るべく、港町の小さな空港にやってきた。

「おー！縁寿ちゃん！礼御くん！久しぶりやなあー！」

空港に入ると一際大きな声がかかった。この怪しい大阪弁は…

「秀吉おじさんお久しぶり。相変わらず元気ですね。」

「お、お久しぶりです。」

俺はしっかりと挨拶を返すが、縁寿は秀吉さんの声のボリュームにビビったのか、すこし控えめにいった。

「もう。やあねえ貴方ったら。毎年その大きな声で縁寿ちゃん驚かせちゃってえ。」

絵羽さんの毒っ気も変わらない。

「お久しぶりだね。縁寿ちゃん。礼御くん。留弗夫叔父さん達もお久しぶりです。」

「はあー。譲治くんは本当に礼儀正しいなあ！縁寿も礼御も譲治くんみたいな大人になれよ？」

「本当ね。留弗夫さんみたいには絶対させたくないわね。」
さらりと酷い霧江さん。

「おいおい。その言い方はねえだろうよ。」

空港に先に来ていた親族は長女一家だけのようで、楼座さん達はまだ来てないようだったが、しばらくしてようやく来た。

「お久しぶり。みんな早いわね。」

と楼座さん。こうして見ると、確かに他の兄弟と比べて、かなり若いなあ楼座さんは。

「楼座が遅いのよお。もつと余裕を持って早めに来なきゃあ。」

「…ごめんなさい。昨日も夜遅くまで仕事していて、あまり寝てなくて…」

絵羽さん…悪い人…ではないんだろうけど、些か毒性が強いな。

「うー。お久しぶり…です。」

少し言いくそくに敬語を使って挨拶する真里亞。

「あ！真里亞お姉ちゃん！久しぶり！」

「……う？あ、縁寿！礼御も。久しぶりだね。今日の服かわいいね。」

「あ！気付いてくれた？せっかくオシャレしたのに誰もこの事に触れてくれなくて…」

「うー！それでも真里亞は、ママの娘だからね。オシャレには詳しいよ。」

腰に手を置き、えっへん！とでも言うようなポーズをした。真里亞がオシャレに詳しいとは、初めて知ったぞそんな事。

「聞いてよお姉ちゃん。礼御がオシャレなんか興味ないんだって！オシャレしたら絶対かつこよくなれるのに。」

「ちょ。そんな事ここで言う事ないだろう。」

デザイナー会社の社長がいるんだぞオイ。

「うー。それは良くない。オシャレは大事！」

「だよーね！オシャレは大事！」

縁寿と真里亞が意気投合する。そこへ譲治が入ってきた。

「ははは。確かにオシャレは大事だね。そうゆうので人の印象も変わるし。」

「印象が変わる？」

「そうだよ。例えば暗めの色合いの服を着れば、大人っぽい感じがしたり、明るめの色の服を着れば、元気な感じが出たりね。そういう服やその着こなし方によって、同じ人でも違う印象を受けるんだよ。」

20へえ。結構凄いなオシャレってそれでも興味ないが。

「ほら！譲治お兄ちゃんだって。オシャレは大事って言ってるよ！それでも興味ないの？」

「ないもんはないよ。」

「もー何で？オシャレ楽しいよ？オシャレ楽しいよ？」
何故二回言った。

「縁寿ちゃん。女の子の君にはそう思えても、男の子の礼御くんにはそう思えないんだよ。男の子と女の子じゃ、考え方も感じ方も全然違うからね。もちろん人それぞれでも十分違うけどね。」

譲治がフオーする。危ない危ないこのまま放置されてたら、縁寿のオシャレ講座が始まる所だったよ。

「…そういうものの？」

縁寿は少し納得しない様子だったがしばらく考えて。

「まあ、仕方ないか。」

と言つふつに俺をオシャレに改造する事を諦めたようだ。
その時ちょうど空港内に飛行機の搭乗用意ができたのか呼び出しの
アナウンスが掛かった。

episode 15

私と貴方で推理ゲーム（前書き）

今回いそいで書いて激短いですが、何気に重要な話です。

「六軒島を舞台にミステリー小説か…。」

「はい！この島って絶好のミステリーの舞台じゃないですか。孤島で怪しげな碑文と黄金魔女伝説。そして遺産争い……そう思いませんか？」

俺を見つめる紗音の瞳は、後ろに置いてある黄金よりもキラキラと輝いていたように見えた。

現在俺は紗音に誘われ黄金郷でお茶会をしていた。そこで紗音はミステリー小説を書きたいのでいいアイデアはないかと相談して来たのだ。

「探偵役は誰がいいと思いますか？」

紗音が聞いてくる。たぶん紗音が書くこうと思ってる小説……惨劇ののちに世間を騒がせる原因となったボトルメールだ。なら探偵役は決まっている。

「戦人にいちゃんはどうか？あの人結構推理物にうるさいし、頭もいい（嘘）し。」

「戦人…様を？……………確かに戦人様なら…」

紗音は最初は微妙そうな顔をしていたが、急に妙に納得したようになった。何に納得してるんだ。

紗音視点

「戦人にいちゃんはどうか？あの人結構推理物にうるさいし、頭もいいし。」

戦人さんの名前を礼御様の口から聞いただけで心臓がドキリとなった。たぶんまだ、戦人さんの事を引きずってしまっているからだと思う。

「戦人…様を？……………確かに戦人様なら…」
戦人さんなら……………犯人…いや、私に立ち向かうのに相応しいかも
しれない。お話の中だけど、私と戦人さんが、ミステリーを語り合
う。さながら5年前のあの頃のようにじゃないか。いつか、戦人さん
が本当に帰ってきた時にも、この小説を見て貰って推理してもらっ
たのも楽しそうだ。

「その案。採用です。」

「うーん、やっぱり嘉音くん登場させたいなあ……」

紗音が、ふと言った

「嘉音……?」

「そっぴゃ、もう嘉音とっくに福音の家から来てるはずなのに、いないな。」

「はい。このミステリー小説が実在の人使おうって思いつく前に考えていた、創作キャラなんです。」

「へえー。」

嘉音ってやはり幻想キャラだったか。まあ手からブレード出せる人間なんていないしな。

「せっかくがんばって思いついたキャラですから。出さなきゃ勿体無いです。」

「そんなにを出したいならだしやいいじゃん。」

「でも、実在の人が出てくる話に一人だけ不実在の人がいたら不自然じゃないですか。」

まあ、そうだな。そっぴゃ未来世界の偽書読んだ人らは嘉音なんて存在しなかった事に気付かなかったのか? 右代宮はともかく、福音の家の人らとか「嘉音って誰?」と思ってもおかしくない。episode 4で未来世界では85年の惨劇の事、六軒島18人殺しとか言われてるって言うてたけど、金蔵をいれても17人分の遺体しか見つからないだろうに何故18人殺しと呼ばれてるんだ?

うー……うーん。わからん。

「まあ、別にいいじゃん自己満足の小説なんだし不自然でも。」

「……そっぴゃですね。自分の好きな様に書いてみます。」

「そっぴゃと紗音はどこやら原稿用紙を取り出し、鉛筆でもくもくと小説を書き始めた。」

「どれどれ……」

「……………」(じーつと紗音の書く小説を見つめる)

「……………」あの。」

紗音が手を止める

「なに、ねえちゃん」

「見られると恥ずかしいです。」

「俺は気にせずにつてうわぁ!？」

急に紗音に抱きかかえられる。

「よいしょつと…気にせずって言われても気になりますよ。なので

ここからご退出願います。」

「ちよつ。だからつて、抱きかかえなくても。おーろーせー!!滅

茶苦茶恥ずいから!」

俺は紗音に抱えられ、黄金郷を強制退出させられたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1746q/>

うみねこのなく頃に夢

2011年6月9日14時39分発行